

シカによる被害と野生動物保護管理

京都大学大学院農学研究科・高柳 敦

現状をどう捉えるか

今回のタイトルには「シカ被害」という言葉を選んでしまったが、実はこの使い方は私自身にとっては少し微妙である。サル、シカ、イノシシなど野生動物による被害がよく取りざたされている昨今、時に「シカ害」という言葉を目にすることがある。この言葉は「シカによる被害」という言葉が長すぎるのでそれを縮めただけの言葉であるが、私自身はこの言葉があまり好きではない。というのも、この言葉は「シカ=害」という響きがあるからである。もちろん、誰も「シカ=害」とは考えていないと思うが、言葉とは怖いもので使っている内に、その側面しか見なくなってしまうことがある。気をつけなければならないと思っながら、微妙な言葉を使ってしまい反省している。

さて、なぜ、こんな事から述べ始めたのかというと、今日の課題「シカとどうつき合うか」を考えるときに「被害」とは何かを考えて頂きたいからである。シカが植物を食べること自体を被害と考える人はいないだろう。そんな風に考えたらシカは生きて行けない。でも、おそらく、今日、山を歩いて食痕を発見するたびにシカによる被害と意識することになるだろう。食痕を見ながら、「これはよい、これは被害」などとは誰も言えない。一方、農地や造林地であれば、農作物や造林木に発見された食痕は全て被害である。どうしてそうはっきりするのだろうか。経済的にはお金をかけて生産しているものが傷つけられて価値が下がるので被害であると認定されると思われがちだが、それより心情的に人間にとって価値ある物が損なわれることが被害と認識される方が強いと思っている。つまり、「被害」という言葉は人間の価値観と結びついているのである。

では、自然におけるシカの採食をどうやって被害と判定するのか。現在、シカが自然植生に多大な影響を及ぼしている状態を生態系被害と呼ぶ。私も必要に応じてこの言葉を用いることもあるが、

上に述べたような理由からこの言葉は積極的に用いず、シカによる植生改変とか植生の後退や下層植生の消失などという表現をよく用いる。その意図は、自然が変わった様子をきちんと記述することが重要で、その後の価値判断は別に考えようとい

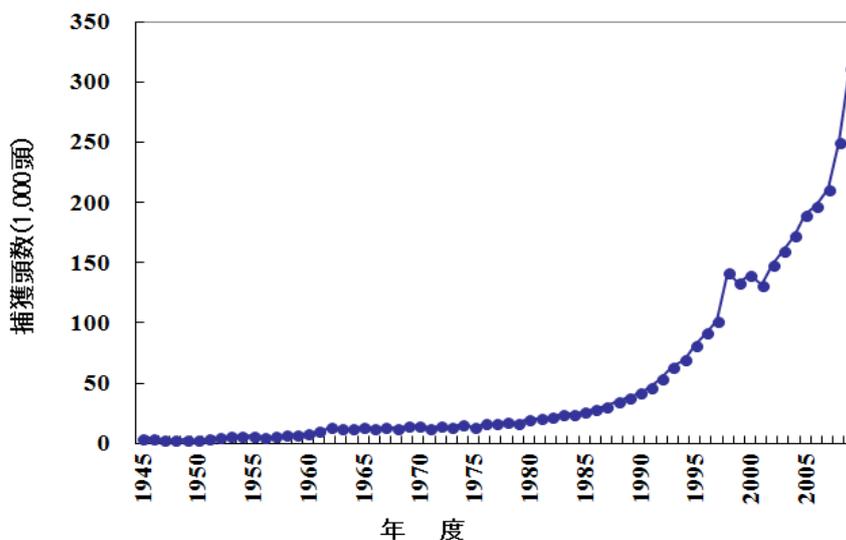


図1 全国のニホンジカの捕獲数の推移

うことにある。シカがいることで自然は変化する。その変化は人間が気づかないレベルから今のように激しい被害とされるまで様々である。

図1にシカの捕獲数の推移を示したが、これを見ると1980年代後半から急激に増加しているような線を描いている。これは捕獲数の推移であるが、個体数はこれ以上に増加している可能性があり、個体数のおおよその傾向として見て構わないだろう。宝ヶ池に限らず、全国で問題になっているシカの影響は、この増加曲線のどこかで適切であった時期があったと考えることもできる。

それがどの時期だったのかは、我々がどの程度が自然であると認識するかどうかにかかっている。つまり、私たちの自然観が大切なのである。昔の自然についての情報があれば、それをもとに「〇〇年代の□□□の森林」を再生することも可能かもしれないが、そのようなデータがあることはほとんどない。そのため科学的にはゴールとなる自然状態ははっきりしない。その場所に成立すると推定される潜在自然植生の情報や過去の写真や文章からこれが「昔の□□□」と呼べる自然を見だし、その自然が再生するようにして行くことになる。その過程は、原始的な自然では、自然の再生力のみで回復を図るが、人為的な影響を受けてきた宝ヶ池のような場所では、積極的に人間が関与しても良いのである。

その再生過程において、シカがどのような影響を与えるかを観察しながら、シカの個体数や行動を制御することが必要となる。原始的な自然ではシカもそのままにすべきではないかという考え方もある。しかし、現在の植生の大きな変化がシカによるものであることが明らかで、かつ、おそらく過去に日本列島で見られたことのない変化であるとする、この変化は現代の人間の影響によってシカが原始的な自然状態から違った状態にあるためだと考えるべきであろう。

そのような「過去に経験したことがない」シカの状態が生じた原因として、捕食者（オオカミ）の絶滅、自然環境の変化、気候の変化、狩猟の変化、保護施策などが考えられる。このうち、オオカミの絶滅が強調されることが多いが、現在の状況に直接結びついてはいない。もし、オオカミが絶滅してシカが増えたのなら、もっと昔に大問題になっていただろう。私は、これらの要因の中で最も大きいのは狩猟の変化であり、その次が保護施策であったと考えている。

共存のための3つの方法

人間の影響で起きた変化であるのだから、人間がきちんと対応する必要がある。その対応の仕方は大きく3つに分かれる。野生動物を保全し、かつ大きな被害問題がなくて、狩猟も適正に行えるようにすることを野生動物保護管理というが、それは3つの管理から成り立っている（図2）。一つは生息環境管理で、これは生物多様性を維持増大できるように自然を管理することである。そうして保全された生息環境において、対象種が絶滅しないように、かつ、社会的に受け入れられる適切な個体数になるように、保護したり捕獲したりするのが個体群管理であ

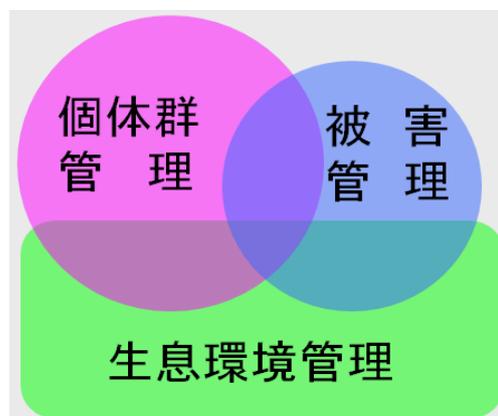


図2 野生動物問題への対応
－ 3つの管理 －

る。そして適切とされる個体数でも生じる被害を効率的に許容限界以下にするのが被害管理である。これら3つの管理を組み合わせると望ましい状態を作り出してゆくことになる。

単純にシカを捕獲して個体数を減らせば問題は解決すると考える人もいるかもしれない。しかし、先に述べたようにシカの個体数がどのくらいがよいのかはわからない。そこで、様々な手段を組み合わせ、私たちが望む自然状態に近づけながら、どのくらいのシカがいるのかがいいか（「いてもいい」ではない）を判断してゆかなければならない。自然の変化のスペンは人間の寿命よりはるかにずっと長い。焦らずにコツコツと自然とつき合う気持ちが必要だと私は考えている。

宝ヶ池でどうするか

さて、宝ヶ池の森林は、現在、ナラ枯れとシカの採食の影響で極めて厳しい状況に立たされている。土壌が流出し木の根が浮き上がり、倒れる樹木も出始めている。東山全体でシカの影響によって植生がなくなっており、私は大きな問題と考えているが、根返りがよく観察されるほどではない。なぜ、宝ヶ池でそれほど深刻な事態を迎えているのか、これは、今後、調査してあきらかにしてゆかなければならない。

しかし、その調査を待たずに対策を進めてゆかなければならない。その時に重要なことは、モニタリングをすることと部分的でもよいから植生の保護対策を行うことである。シカの捕獲は進めなければならないが、捕獲によってすぐさま植生が回復できる状態になることはあまり期待できない。

宝ヶ池は、京都大学の上賀茂試験地からこの子どもの楽園までが一繋りの森林となっている。西と南と北の三方向は、市街地などでシカが進入して来やすいと思われ、ここへシカが進入できるルートはいくつかに限定される（次ページの図）。このうち、上賀茂試験地の北側は、現在はグラウンドが作られてシカの進入ルートとしてほとんど機能していないのではないかと予想している。となると主な進入ルートは高野川と鴨川から上がってくるルートとなる。これらのルートをコントロールしながら中のシカの個体数を減少させてゆけば、個体数を減少させることができるかもしれない。これらのルートを遮断できなければ、北の山から川伝いシカが新しく進入してくることが予想され、捕獲をしても個体数が減らない恐れがある。

最初の段階として、現在の植生の状況とシカの利用状況を把握することが大切である。そのためには、植生の衰退状況やシカによる被害状況を記述し、けもの道や糞の分布を把握することが最も基本的な方法である。最近では自動撮影装置が安くなったので、自動撮影装置を様々な場所に設置すれば、シカの行動をより正確に把握することもできる。

それらの情報をもとに、守るべき場所をいくつか選定して、そこへ防鹿柵を設置して植生を保護することが大切である。そうしないと、将来、シカが減ったときには、周りに回復する源となる植物がないという事にもなりかねない。それ以上に、土壌流出などで、より大きなダメージや災害が発生するかもしれない。

こうしてモニタリング体制と植生保護対策を進めながら、シカの捕獲や進入ルートの遮断をして、シカの影響の変化を見ながら、将来の着地点を探してゆくことになるのではないかと考えている。長い道のりの最初の一步として皆さんの力が活かされることを願っている。

